

日本と西ドイツの体力・スポーツに関する比較研究

鬼塚幸一、(鹿児島工業高等専門学校)、多々納秀雄、徳永幹雄、(九州大学)
岡田 猛、藤島仁兵(鹿児島大学)

国際比較、行動特性、態度、価値意識、国民性

最近の総理府調査によると一年間に何らかのスポーツに参加する一般成人は7割近くに達している。この十年余りのスポーツにみられる大衆化・高度化の進展は注目すべき現象である。しかし、わが国のスポーツの大衆化・高度化が余りにも急激であったため、そこにはスポーツをめぐる外的(施設、グループやクラブ、指導者などの条件の基盤)あるいは内的(人々の態度や価値意識、行動様式に関わるもの)な諸側面に関する様々な問題・課題あるいは矛盾が指摘されていることも確かであり、いろいろな角度からの研究がなされてきている。

そこで、今回は日本と西ドイツの国際比較調査によって、日本人のスポーツにみられる行動特性、そしてそれを規定するスポーツに対する態度や価値意識などの類似性あるいは異質性を明らかにすることにより、日本人のスポーツの特性、更には日本人の国民性を究明することにした。

2. 調査の概要

(1) 調査内容

実施した調査は、「体力・スポーツに関する調査」と「スポーツに関する調査」の二種類である。前者は昭和54年10月に総理府より発行された「体力・スポーツに関する世論調査」を参考とした。後者は、徳永らのスポーツ行動予測、Kenyonのスポーツへの態度、Edwardsのスポーツの価値意識、Snnyderのスポーツにおける総理意識などに関する各々の測定項目を予備調査によって精選したものである。いずれも、日本人やオーストリア人のドイツ諸専門家及び西ドイツのスポーツ研究者とによって協同討議の上で、翻訳や内容の検討がなされてきたものである。

以下紙幅の制約により、「体力とスポーツに関する調査」結果の内容を摘記することにした。

(2) 調査の対象、時期

日本及び西ドイツの大学生を対象とした。日本は昭和58年12月、九州、山口地区の国公立の大学の体育授業を利用し、西ドイツは昭和58年6月、オルデンブルグ大学において個人的に依頼して実施した。

3. 結果の要約

- (1) 自己評価で「健康である」と答えた者の割合は西ドイツ、別けても女子に高かった(女… $P<0.05$)。
- (2) 健康、体力に「常に注意をはらっている」と答えた者の割合は西ドイツに多かった(男女… $P<0.01$)。
- (3) 健康、体力への注意内容は、日本では睡眠、休養が多くてスポーツ活動は少なく消極的健康管理型であるのに対して、西ドイツはスポーツ活動が中心となり積極的健康管理型である。

(4) 「人並に体力がある」と評価した者は、西ドイツの男女ともに多かった(男、 $P<0.05$ 、女、 $P<0.01$)。

(5) 男女とも西ドイツに疲労感が「よくある」や「時々ある」と答えた者が多く、日本には「そういうことはない」と答えた者が多かった(男女… $P<0.01$)。しかし、仕事(勉強)に対して「無理がきく」と答えた者は、男女とも日本が圧倒的に多く、西ドイツに「無理がきかない」と答えた者が多かった(男女… $P<0.01$)。

(6) 運動欲求や運動不足は、日本の女子に「感ずることがある」と答えた者が多かった(女… $P<0.01$)。

(7) スポーツ活動では、軽スポーツの実施程度が両国ともその他のスポーツ種別より多くなっている。しかし、野外スポーツでは西ドイツが、競技的スポーツでは日本が多くそれぞれの国情や国民性の相違を示している。

(8) 野外スポーツでは、両国とも水泳、サイクリング、ハイキングが三大種目として共通していたが、その実施程度では西ドイツが多かった。

(9) スポーツクラブ所属は、日本が学校中心で、西ドイツは学校と地域クラブが中心である。加入動機は、日本が親睦中心に対して西ドイツは楽しみや継続性が重要視されていた。

(10) 個人的に行う理由として、西ドイツは「仲間とする気がない」という理由が日本に比べて多く国民的な意識差を示唆している。

(11) 西ドイツの女性は、「運動不足感がない」と答えた者が多く($P<0.01$)、「身体の鍛錬」の実施理由やジョギング、サイクリング、サッカーなどのスポーツを好むことなど、日本の女性に比べて著しい相違があることからスポーツ活動に対して積極的である。

(12) 国際大会への関心は、日本が9割の関心を持ち、西ドイツでは男子5割、女子7割で関心が低い(男女… $P<0.01$)。また、日本の男女に「大に行った方がよい」と答えた者が多く、西ドイツでは「今のままで十分」や「わからない」と答えた者が多かった。

(13) 子供の体力感では、日本の男女に「体格は向上したが体力は向上していない」と答えた者が著しく多かった(男女… $P<0.01$)。また、日本の子供は運動不足になっている」と答えた者が多かった(男女… $P<0.01$)。

その他にも興味ある知見がみだされたが、しかし、これらは表面的にとどまっているので、今後更に国際比較研究として構造的に、また異なる角度からの分析を加える必要がある。